

## 学 位 論 文 要 旨

研究題目

**Lymphatic spread patterns in young versus elderly stage III colon cancer patients**

(AYA 世代および超高齢者における Stage III 大腸がんリンパ節進展形式の後ろ向き探索研究)

兵庫医科大学大学院医学研究科

医科学専攻

器官・代謝制御系

下部消化管外科学 (指導教授 池田 正孝 )

氏 名 宋 智亨

リンパ節(LN)転移は大腸癌の最も重要な予後因子である。中枢へのリンパ転移は、リンパ節郭清の範囲と関連し、臨床的に重要であり予後不良因子として同定されている。年齢とリンパ節の解剖学的位置の関係はまだ解明されておらず、中枢のリンパ節転移陽性率が年齢によって異なるかどうかは不明である。以前の我々の研究で結腸癌における左右の側性とリンパ節転移の程度、転移パターンとの関係を報告した。その中でリンパ節の転移の程度として近傍から L1L2L3 と定義。また転移パターンとして近傍から順に転移がみられるものを Sequential pattern、飛び飛びに転移がみられるものを Skip pattern として定義した。今回、若年および高齢の結腸癌患者におけるリンパ節転移パターンとその予後への影響を調べた。1998 年から 2018 年の間に日本の 8 施設でリンパ節 D3 郭清を伴う外科手術を受けた病理学的 Stage III 結腸癌患者を対象とし、45 歳以下を若年者群、80 歳以上を高年齢者群として両集団のリンパ節転移の程度および転移パターンを分析した。若年者群 210 人と高年齢者群 80 歳 349 人を集積した。郭清されたリンパ節の総数と転移リンパ節数は、高年齢者群と比較して若年者群で有意に高かった (それぞれ  $P < 0.001$ ,  $P < 0.001$ )。主リンパ節転移 (L3) は、高年齢者群よりも若年者群で高かった ( $p = 0.012$ )。転移パターンとしては Skip pattern は、両群でほぼ同程度であった。無再発生存期間における多変量解析では、主リンパ節転移は若年者群では予後不良因子とされたが (HR5.21)、高年齢者群では違った (HR1.73)。結論として Stage III 結腸癌患者において、主リンパ節転移のリスクは若年患者で高く、生物学により悪性度が高いことが示唆された。さらに、主リンパ節転移の予後への影響は、若年患者でわずかに高かった。以上から、若年患者では主リンパ節転移陽性の頻度が高いため、根治にリンパ節 D3 郭清が必須である。高齢の患者ではリンパ節 D3 郭清術が有効である可能性もある。